



# からしだね

2020年8月・9月号  
(562号)

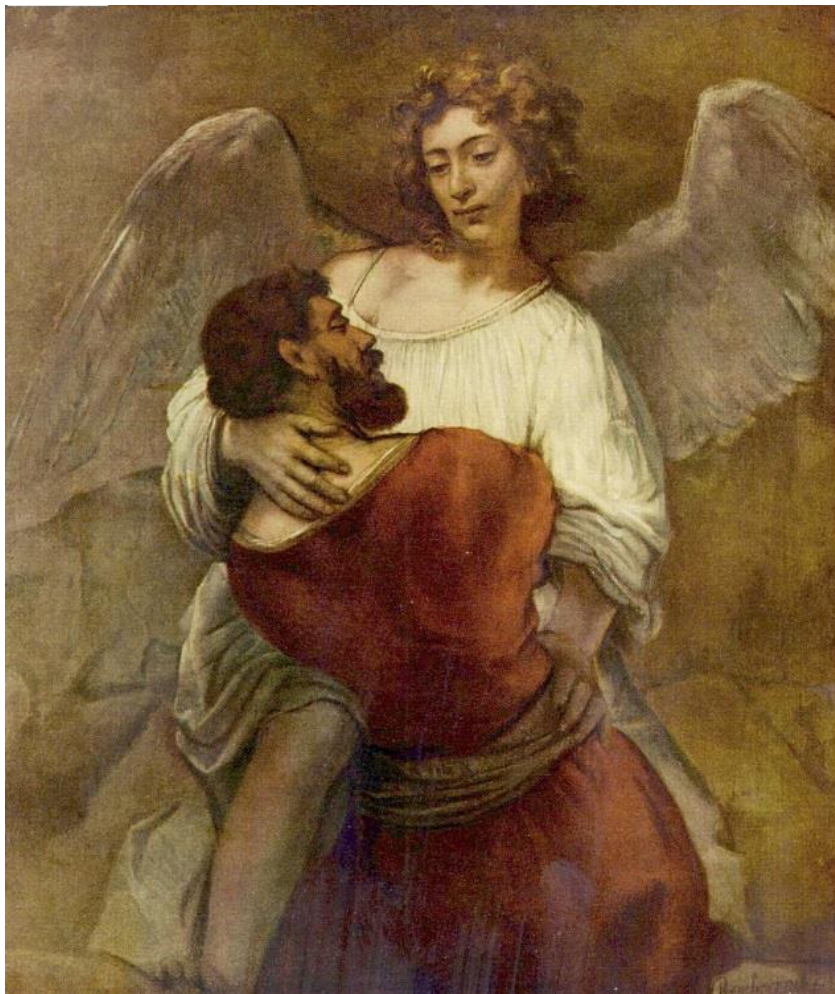
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



## 本号の記事の主題など

ノノイ・プラザ神父の巻頭言  
「人生のはかなさと不滅」

聖堂耐震工事だより—その2—

「ヤコブの祈り」 教皇一般謁見演説から  
堂内献金の日程を大幅に変更しました

されじお大山利郎さんの遺稿  
「足引きずりながら天国へ」

8月と9月の変更された行事予定  
バザーの中止について  
今月の表紙絵について

## 人生のはかなさと不滅

ノイ・プラザ 神父

こんなにふうに言うと、ぱっとめには矛盾してるみたいです。何々ははかない、と言うと、いつまでもあるわけではないことをいうわけですから。おそかれ早かれ人生は消え去りなくなってしまう。心臓が鼓動を止めた瞬間、人生はおしまい。はかなさとは対照的なのが恒久と不滅を暗示する永遠という考え方で。だから水と油同様、かりそめと永続性とは混じり合わないように思えます。

人生の移ろいやすさは、みんなが認めています。世界中にいま蔓延している疫病をまえに、人生の壊れやすさを思わない人がいるでしょうか。加えてNHKが簡潔に語るとおり、「南西日本で百人近くも人命を奪った未曾有の豪雨のあとには破壊の爪痕が残りました。」行方不明になっている方もおいでですが、ひょっとしたら亡くなっているでしょう。いったいこうしたことから、なにを学んだらいいのでしょうか。

キリスト教の伝統では、聖イグナティウス・ロヨラのような偉大な霊的著作者がすすめるのは、死について深く思いをいたすことです。黙想中、聖ロヨラは黙想者たちに、たとえば自分が死の床にあると想像するよう求めました。この世にあって過去をふり返り、どんな決断をしたかったかを問われるのです。そうしていると黙想者は、自分の人生がどんなにはかないかを考えて、人生をもっと意義あるものにしようという気になってゆきます。

最近見た「ユーチューブ」のビデオでしたが、今は亡きアップルの最高経営責任者スティーブ・ジョブズさえスタンフォード大学の院生をまえにおこなったスピーチのなかで、死を心にとめるよう誘（いざな）っていました。「ほどなく自分は死んでゆくのだと思っておくことは、人生で大きな選択をおこなうための助けとなる、これまでわたしが巡り会ったもっとも大事な手段なのです。死にたい人なんていません。

天国に行きたいと思う人だって、そのために死なないといけないのはゴメンです。でも死はわたしたちみんなが分かちあっている目的地です。」

日本では8月にあれこれお祭りがあるのは、よく知られています。そのなかに仏教徒の習慣としてはお盆があります。ご存じのとおり、このお祭りは自分たちの祖先の霊に敬意を払うものです。この頃になると、祖先の霊が仏壇やお墓にふたたびやって来るのだと信じられています。でもほどなくすると、この御祖先の霊は火に導かれて自分たちの永遠のすみかへと戻ってゆくのです。

わたしたちキリスト教徒にすれば、死はもちろん最終目的地ではなく、天国こそがそうなのです。とこしへの至福のなかで神と共に生きることこそ、わたしたちの定め。だからこそ死を迎えても、命は形を変えるだけで終わってしまうのではない、とわたしたちは信じる。毎年8月15日にお祝いする被昇天記念のおかげで、この真実をわたしたちはいつも思いおこします。この世の命を聖マリアが終えたとき、彼女は肉体と魂もろとも天国の栄光へと引き継がれた。これこそが聖母被昇天を信じるわたしたちの信仰のエッセンスです。

私たちの望みは、聖母が天国へと引きあげられたのなら、私たちも死を迎えたとき同じように天国に引きあげられたいということです。天国にある聖母の住まいが、わたしたちのように信仰にみたまされた一人一人の信者にも約束されていると考え、どれだけ癒やされることでしょうか。死のイメージがあらわすような命のはかなさをまえにしても怖がってはならない。この世の旅が終われば、別の命が始まるからです。しかし今度は終わりが無い命です。

8月・9月のガラスケースのことば

主の恵みの力は、弱さの中でこそ十分に発揮される

第二 コリント 12・9

(福音宣教委員会選)



## 聖堂耐震工事だより —その2—

聖堂耐震改修委員会

今年の梅雨も、主に九州で大規模な災害をもたらすほど、6月から7月にかけて雨の日が多かったと振り返ります。にもかかわらず、耐震工事は順調に推移していると施工者から聴いております。特に外壁塗装を始めるタイミングを見計らうのが難しかったそうです。

今後の工程を簡単に申し添えます。

## 工程

- ・7月末まで：塗装工事、内装工事
- ・8月1週目：外部足場解体、内装壁床工事、空調機取付
- ・8月2週目：お盆休み、内部足場解体
- ・8月3週目：養生撤去、東側道路側植栽整備、検査
- ・8月4週目：手直し工事・引き渡し

工事期間は残すところ1カ月余りですが、耐震委員会では、なるべくこれまでの聖堂の良さを残しながら、耐久性と使い勝手の良さが両立するよう、

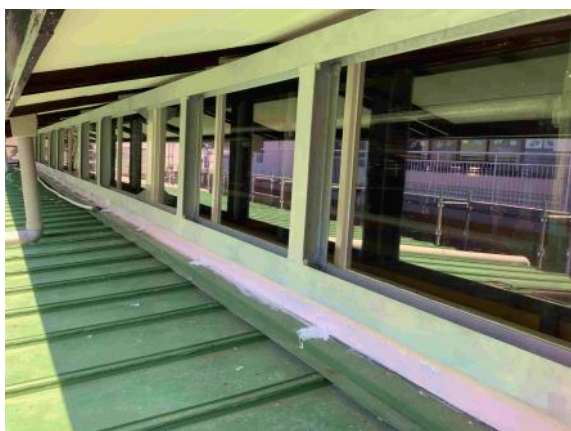
同時に与えられた予算を大きく超えない範囲で済むように、最後のあがきを続けております。

オルガン(専門業者)、ベンチ等(信徒)の聖堂への引越は、施工者との協議次第では8月4週目の引き渡しを待たず、実施できるかもしれません。

なお、例年8月末に行っておりますワックスかけは、今年は実施しません(耐震工事の中で実施頂けます)。

コロナウイルス感染症と共存するなか、9月26日の稲葉助祭叙階式がどのような形で行えるか現時点で分かりませんが、美しく安全な聖堂を用意して晴れの日を迎えたいと思います。

最後に池田教会の皆さまには、長期間にわたってカール記念館でのミサを堪忍頂き、少なからぬ献金でこの工事を支えて頂きましたこと心より感謝申し上げます。完了まであと少しお付き合いください。よろしくお祈りします。



聖堂天井際の窓枠外側に、ハシゴを横にした形の耐震補強鋼材が入りました。



小聖堂の間仕切り工事中



聖堂北面を東から六甲山方向を望む。ウレタン塗膜防水が完了して屋根の色が緑からグレーに変わりました。

## 「ヤコブの祈り」

教皇フランシスコ、2020年6月10日一般謁見演説

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、おはようございます。

祈りに関する連続講話を続けましょう。創世記は、はるか昔の人々に起こった出来事を通して、わたしたちの生活にも反映させることのできるメッセージを伝えています。父祖たちの中には、ヤコブという自分のすばらしい能力を抜け目なく発揮した人がいます。聖書には、ヤコブとその兄エサウの間の難しい関係が記されています。子どもの頃から、両者はライバル関係にあり、その関係はその後も続きました。ヤコブは双子の次男でしたが、策略を用いて、父イサクから長子の祝福と権利を獲得します(創世記25・19 - 34参照)。それは、この如才のない人物がそれから行う数多くの策略の発端にすぎません。「ヤコブ」という名前も、抜け目なく振る舞う人という意味です。

ヤコブは兄から遠く離れたところに逃げることを余儀なくされますが、生涯のあらゆる企てを成功させているように見えます。駆け引きにたけ、富を蓄え、家畜の大きな群れの持ち主となります。そして、ラバンの二人の娘の内、自分が本当に好きな美しい娘との結婚を、根気と粘り強さによって成し遂げます。ヤコブは自分の才覚と抜け目のなさによって、欲しいものは何でも手にします。現代の表現を用いれば「自力で大成した人」です。しかし何かが欠けていました。それは自分の故郷との温かい結びつきです。

ある日、彼は昔住んでいた故郷に帰るよう呼びかける声を聞きます。そこにはつねに険悪な関係にあった兄エサウがまだ住んでいます。ヤコブは出発し、多くの民と家畜を率いて長い旅を続け、最終地点であるヤボク川に到着します。ここで創世記は、記憶すべき一ページをわたしたちに示しています(32・23 - 33参照)。父祖ヤコブは、大勢の民と家畜のすべてを率いて川を渡った後、独りでその対岸に留まります。そして彼はこう考えます。明日、何が起こるだろうか。自分が長子権を奪った兄エサウはどんな態度にでるだろうか。ヤコブは考えあぐねます。そしてあたりは暗くなり、突然、何者かが彼をつかまえ、格闘し始めます。『カトリック教会のカテキズム』には次のように説明されています。「教会の霊的伝承によると、この物語は信仰の戦いである祈り、また堅忍の勝利である祈りを象徴するものです」(2573)。

ヤコブは一晩中格闘し、相手に退くすきを与えませんでした。最後に彼は勝利しましたが、ももの

関節を打たれ、それ以後、足を引きずって歩くようになります。謎に包まれたこの敵は、ヤコブに名前を尋ね、それから言います。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」(創世記32・29)。まるでこう言っているかのようです。「お前はもうこのようにまっすぐに歩く人間ではない。名前を変えられ、人生を変えられ、生きる姿勢も変えられたのだ。これからはイスラエルと呼ばれる」。そしてヤコブも相手に尋ねます。「どうか、あなたのお名前を教えてください」。相手は名を明かしませんが、その代わりにヤコブを祝福します。そしてヤコブは、自分が「顔と顔を合わせて」神を見たことを知りませぬ(30 - 31節参照)。

神との格闘とは、祈りの一つの比喻です。ヤコブは他の場面では、神と対話し、親しく身近な存在として神を感じていました。しかし、この夜、負けるかと思えた長い格闘を通して、彼は変わります。名前も生き方も人格も変わります。変えられた父祖となるのです。この格闘のときばかりは、彼はどうすることもできず、その狡猾さも何の役にもたちません。もはやその策略も打算も通用しません。自分は恐れに震える、死すべき運命にある人だという真理へと、神はヤコブを立ち返らせます。格闘の間中、彼は恐れていたからです。そのとき彼は、自分の弱さ、無力さ、そして罪を神にさらけだします。そうしたヤコブだからこそ、神から祝福を受け、その祝福のもとに、足をひきずり、傷ついて弱り果てながらも、約束の地に新しい心で入ることができたのです。あるご高齢の方——善良で敬虔なキリスト者で、神を心から信頼する罪びとです——がこう言っていました。「神はわたしを助けてくださいます。決してわたしを独りにしておかれませぬ。わたしは天国に行きます。足を引きずりながらですが、きっと行きます」。ヤコブは最初、自信家で、抜け目のない自分を信じていました。彼は恵みをよせつけない人、いつくしみを感じられない人でした。いつくしみとは何であるかが分かりませんでした。「さあ、ここにいるわたしが命令するのだ」。自分にはいつくしみが必要だとは考えませんでした。しかし神は、彼に欠けているものを与え、守ってくださいました。自分には限界があること、自分はいつくしみを必要とする罪びとであることを教え、救ってくださったのです。

わたしたちのだれもが、夜に、人生の夜に、たびたび訪れる人生の夜に、神と会うこととなります。

それは闇に覆われたとき、罪のとき、道に迷っているときです。そうしたときに、わたしたちはつねに神と会います。思いがけないときに、本当に独りぼっちなときに、神はわたしたちを驚かせてくださいます。その夜、わたしたちは何者かと格闘し、自分がみじめな人間——いわば「あわれな者」——だと痛感します。しかし、そのように自分がみじめだと感じて、恐れることはありません。そのときにこそ、神が新しい名前をくださるからです。その名前にはわたしたちの人生のすべての意味が込められています。

神はわたしたちの心を変えてくださいます。そして、神によって変えられた人にだけ与えられる恵みを注いでくださるでしょう。それは、神に変えていただくようにとの素晴らしい招きです。神はわたしたち一人ひとりを知っておられるのですから、どうしたらよいのかご存じです。「主よ、あなたはわたしをご存じます。わたしたちのだれもがこう言うことができます。「主よ、あなたはわたしをご存じます。どうかわたしを変えてください」。

### 堂内献金の日程を大幅に変更しました

堂内献金のうち、4/10の聖地エルサレムへの献金は9/13に、5/11の世界広報の日の献金は10/4に、そして、6/28の聖ペトロ使徒座への献金は11/15に、変更になっています。該当日にはミサ中にご案内いたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

それに伴い、今年度の御受難会への献金は、6/7、7/5、8/9、9/6、10/11、11/1、1/10、2/7、3/7の日曜日の堂内献金を充当させていただきます。よろしく願いいたします。

財務委員会



**されじお大山利郎さんの遺稿****足引きずりながら天国へ — 教皇様の「ヤコブの祈り」を読んで**

教皇フランシスコは、最近の一般謁見(6月10日)で「ヤコブの祈り」をテーマに、教義解説(カテケース)をされました。

私は、以前から父祖ヤコブに興味があり、教皇様の解説に興味を持って読んでみました。

教皇様は、父祖ヤコブに対して、世俗的な面でもかなり高く評価をしておられます。「自分のすばらしい能力を抜け目なく発揮した人」。「自分の才覚と抜け目のなさによって、欲しいものは何でも手に入ります。現代の表現を用いれば『自力で大成した人』です」と。確かに、そんな一面も、大いにあると思います。

父祖といいますが、聖書にも「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と表現されている、神聖な方々です。彼らは神様に、特に愛されていますので、実際そうなのです。しかしヤコブは、祖父アブラハム、父イサクに比べて、品性、信仰、倫理において格段に劣っているようです。アブラハムは、信仰の父と呼ばれるくらい立派。神から、やっとな授かった跡取りのイサクを捧げるように命じられたとき、大いに苦しい状態だったのに、それに打ち勝ってイサクを(精神的にですが)捧げたのです。

こんな偉大な行為、勿論私には不可能。多くの信徒もそうだと思います。それ故に彼は、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒から「信仰の父」と敬われています。

次にイサク。聖フランシスコ・サレジオによると、彼は父祖中、最も貞潔な人です。彼は、あんな時代だったのに、一夫一婦主義者でした。

これに比べてヤコブは、一転様変わり。当時、父親の祝福は、長子権と呼ばれて、精神的にも物質的にも、大きな幸せをもたらすものでした。そしてこの祝福は、順序からすれば、ヤコブの双子の兄エサウが、まず受け継ぐべきものでした。ところがヤコブは、空腹の兄に豆料理を求められたとき、その代価に長子権を要求しました。

最近聞きました。東南アジアの難民は、避難逃亡の際、現地住民から食料を求めます。その代

価に金銀宝石を要求されるとか。もう釣り合いの取れない、阿漕な取引。ヤコブも、そんなことをしたのでしょうか。

さらに後ほど、母レベカにそそのかされたとはいえ、父イサクをだまして、兄に属すべき長子権を詐取します。ヤコブも母も、それは「呪いを招く」ことだと、はっきりと意識していたのです。だが母レベカは「その罰は私が引き受けましょう」と言って、ヤコブに詐取を実行させました。ゆがんだ母性愛でしょうか。なぜかを考えたい方は、一度創世記をお読みください。

その後、ヤコブは兄エサウの復讐を恐れて、母方の伯父ラバンの元に逃避。そこでも紆余曲折がありました。しかし教皇様によれば「(ヤコブは)駆け引きにたけ、富を蓄え、家畜の大きな群れの持ち主となります。そして、ラバンの二人の娘の内、自分が本当に好きな美しい娘との結婚を、根気と粘り強さによって成し遂げます」。

ところがヤコブに転機が訪れます。

伯父ラバンと別れて、故郷に帰るときです。まだエサウが住んでいましたので、復讐を恐れて、家族と財産を安全な地に移し、自身はヤボク川の河岸にたたずんで、一人で物思いに沈んでいました。夜になり、突然、何者かが彼を捕らえて格闘し始めたのです。

教皇様は「カトリック教会のカテキズム」を引用して説明しておられます。この格闘とは「教会の霊的伝承によると、この物語は信仰の戦いである祈り、また堅忍の勝利である祈りを象徴するものです」(2573項)。

教皇様は続けられます。

「この格闘のときばかりは、彼はどうすることもできず、その狡猾さも何の役にもたちません。もはやその策略も打算も通用しません。自分は恐れに震える、死すべき運命にある人だという真理へと、神はヤコブを立ち返らせます。格闘の間中、彼は恐れていたからです。そのとき彼は、自分の弱さ、無力さ、そして罪を神にさらけだします。そうしたヤ

コブだからこそ、神から祝福を受け、その祝福のもとに、足をひきずり、傷ついて弱り果てながらも、約束の地に新しい心で入ることができたのです」。

このようなお言葉を読むと、ふと私も自分自身に思いを致したのです。ヤコブは格闘の最中、自分のもろさと無力、その罪をも神の前にさらけ出す。「自分もヤコブと同じじゃないか。若い時は健康で、自信と意欲、幸福感に満ちて生きてきた。あれは一種の錯覚だったのだろうか」。実態は、その奥底に、全く力のない、よぼよぼの自身が隠れ潜んでいたのです。

「それなのに今の有り様はどうだ。突然、がんを宣告されて七回も手術。腹、肩、指先など、節々が痛くなる。足腰弱まり、杖をついて、ボトボトと歩く速度は半減。気分が悪いときは、一日中ベッドに横たわったまま。家内に、身の回りの世話を頼まねばならない。教会や病院に通うにも、付き添い願わねばならない。彼女も加齢で、体力衰えているのに、誠に申し訳ない限りだ。

もし自分にも『格闘』という経験があるとすれば、それはがんの手術だったな」と。

そして周囲の人々に対しても、その密かな苦しみがよくわかるようになりました。わが尊属は、全て死去。卑属も二、三人鬼籍に入りました。両親や伯父叔母従兄弟たちの死の際、私はその場に臨んでいたのに、彼らの苦しみ不安を十分理解していませんでした。無知の至り。打ちひしがれた今、やっと、深く理解し始めました。

ほとんどの人が、『格闘』、という状態を味わうのではないのでしょうか。必死に祈って、魂が揺さぶられ、自己の弱さが骨身に徹する、という状態です。

勿論、各人の状況は、様々でしょう。しかし一般的に見られることは、老齢期における病気と死の予感、並びに親しい人との死別。特に配偶者との死別でしょう。

多くの人は(私も含めて)、そんな惨めな自分を認めたくない。いつまでも若い、という妄想にしがみついている。その原因は傲慢。つまり自分だけはそんな惨めさとは関係ない人間なんだ、という思い込み。謙遜の不足でしょうか。

人間とは何と惨めな者でしょう。

こんな惨めな状態は、教会が教えるように、人

間の原罪自罪の結果でしょう。私も心の中から罪を犯したい、という願望が湧き出るのを自覚します。自分の意思に反する悪い衝動です。それと戦うのは、大きな苦痛です。

この惨状に対抗するには、二つの方法があると、近頃想うようになりました。いずれも言うは易く行うは難い。

まず次の信念を、心に刻み込むことです。

聖書にもあるように「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」(使徒言行録14・22)また「耐え忍ぶことによって、自分の命を勝ち取りなさい」(ルカ21・19)。

だから「ヤコブの格闘」を経験した人は、天の国に入る、堅実な王道を歩んでいるのです。極めて苦しいが、忍耐と希望を決して捨てるべきではないのです。神様の御前にひれ伏して、憐れみを願ひ続けます。

今ひとつの手段は、罪を消すため、ささやかな善を積み重ねることでしょうね。突き詰めれば、惨めさの原因は、私達の罪でしょう。

そこで「水は火を消し、施しは罪を消す」(シラ書3:30)。

劇作家シェクスピアは言う。「どんな乞食も必ず、少し余分な物を持っている」。また福音にもあります。「貧しい人は、いつもあなたたちと一緒にいる」(マタイ26:11)。

「惨めな自分には大きな事は出来ない。しかし、ささやかながら、余分な物は、きっと持っている。そして周囲の人たちの中には、それを必要とする人たちが、いつもいる」。かく信じて、自分と周囲を注意深く観察。死に至るまで、小善を重ねれば、遂に天国に導いてくださるでしょう。

なおヤコブは、この『格闘』において、ももの関節を怪我して、一生涯、ビッコを引きました。教皇様は、あるお年寄りの言葉を引用しておられます。

「神はわたしを助けてくださいます。決してわたしを独りにしておかれませぬ。わたしは天国に行きます。足を引きずりながらですが、きっと行きます」。

私もまたヨタヨタと、足を引きずりながらも、王道を逸れず、天国へ行きたいものです。

大山利郎

### 8月と9月の変更された行事予定

- 8/3～4 日曜学校合同キャンプは中止。
- 8/8 ドレミの会の夏季キャンプは中止。
- 8/21～23 大阪教区の青年と子供の練成会が中止された。
- 8/22 アルファ・コースは中止。
- 9/6 バザー委員会は中止。
- 9/6 地区委員会は中止。
- 9/20 社会活動委員会は中止。
- 9/23 釜が崎訪問は中止。
- 9/26 「からしだね」10月号の発行は10/3へ変更。
- 9/27 バザー委員会は中止。
- 9/27 地区委員会は中止。

### バザーの中止について

総務委員会

今年度のバザーは、新型コロナウイルス感染症に対する対応が困難なことから、中止することが評議会で決まりました。

池田教会のバザーは、主にカール記念館を会場に行われ、密閉・密集・密接が避けられないこと、また同日開催の聖マリア幼稚園マリアまつりも、今年度中止が決まっていることから、このような判断となりました。

従いまして、バザー準備委員会も開催されませんので、ご了承ください。

### 今月の表紙絵について

オランダの画家、レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン(1606～1669)による、「天使と格闘するヤコブ」である。レンブラントは光と影を大胆に対比させる技法で有名な画家で、代表作は「夜警」など。この作品は1659年ごろ油彩で描かれた。

創世記32章25～30節(新共同訳より)

ヤコブは独り後に残った。そのとき何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところがその人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘しているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ、夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福し

てくださるまでは離しません。」「お前の名は何なのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。

### 黙想会のお知らせ

#### 宝塚黙想の家

#### ■ 日帰り黙想会

8月 お休み

9月24日(木) 10:00～15:30

指導: 染野治雄 神父

9月25日(金) 10:00～15:30

指導: 山内十束 神父

#### ■ 月例黙想会

8月 お休み

9月9日(水) 17:00～10日(木) 15:30

指導: 染野治雄 神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84)3111



### 編集後記

今年は、軒並み大きなイベントから小さな集会まで、屋内外にかかわらず、中止や延期が発表されている。池田教会も漏れなく10月恒例の『バザー』が中止と決まった。

個人的には、甲子園の高校野球が好きな1人である。いつもなら、「春は選抜から」と言われ、まだ冷たい春の雨の中泥だらけになりながらホームでのクロスプレーを観戦したりする。8月は各地域から勝ち抜いた高校が炎天下のグラウンドで頂点を目指す、その体力には脱帽させられる。

今季は春夏大会が中止となったが、何某かの試合があるのは救いであった。来年は新型コロナウイルス禍が終息されていることを願い、元気な球児の姿がみたいものである。

天使の微笑